

令和 5 年 4 月 27 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K11788

研究課題名（和文）南イタリアリアーチェの多文化共生社会におけるコミュニケーションネットワークの研究

研究課題名（英文）Study of the Communication Network of the Multiethnic Solidarity Society in Riace in Southern Italy

研究代表者

中挟 知延子（Nakabasami, Chieko）

東洋大学・国際観光学部・教授

研究者番号：70255024

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：南イタリア・カラブリア州の共同体リアーチェで、地域住民と移民が暮らす多文化共生社会がうまく機能しているメカニズムを明らかにした。住民にアンケート及びインタビューを行い、人間関係を調べてどのようなネットワークが形成されているのかを調べた。元来の地域住民をホスト住民と呼ぶ。計6回の現地調査から、1) 移民とホスト住民が協働する仕事の提供、2) ボランティアによるイタリア語の学習サポート、3) 移民とホスト住民との混住が、共生を成功させていることが分かった。これら3つの仕掛けを持続可能にしているのは、共同体の首長ルカーノ氏の強力なリーダーシップと首長をサポートするボランティア団体の存在が不可欠であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究におけるリアーチェ村の多文化共生社会のメカニズムの解明は、日本の各地における国内外からの移住者との共生社会を成功するための一つの方策を提案している。移住者を孤立させずに、地域社会に物理的・精神的に迎え入れることが重要であると示した。また、移住を推進する支援団体の存在について不可欠であるとともに、団体メンバーは住民や、すでに生活している移住者が積極的に関与することも大事であると分かった。本研究での共生社会の鍵となる相互性と双方向性の重要性が明確になったといえる。

研究成果の概要（英文）：In this research, we explored why well functioned the mechanism in a multi-cultural inclusive society in which the immigrants and the locals live together in Riace, a small village of Calabrian region of Southern Italy. We conducted questionnaire and interviews to host locals and the immigrants and analyzed interpersonal network using social network analysis. 6 field survey has been conducted in total. The following 3 factors have been revealed: 1) offering of jobs that the immigrants and the host locals are working together, 2) Italian language support for the immigrants by volunteers, and 3) mixed residences of the immigrants and the host locals. The research concluded that these 3 factors make multi-cultural inclusive society sustainable. Moreover it has been indicated that a powerful leadership of Domenico Lucano, mayor of Riace, and some support groups of immigrants settlement are indispensable for driving the multi-cultural inclusive society of Riace sustainable.

研究分野：多文化共生社会

キーワード：多文化共生社会 社会ネットワーク 南イタリア リアーチェ コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

(1) イタリア南部カラブリア州にあるイオニア海に面した古い歴史を持つ共同体リアーチェは、20世紀末に人口が400人程にまで減少し、高齢者も多く消滅の危機に瀕していた。しかし、地元住民とアフリカやアジアからの移民(難民を含む)との共生に活路を求め、20年間におよぶ努力の結果、帰還した地元住民も増え、人口は約6倍になり、多くの住民が幸せであると答える多文化共生社会を実現させている。

(2) 研究者は2018年までにすでに2回リアーチェを訪問し、現地で多文化共生において地元住民と移民をすべて含む住民間で、相互性と双方向性が機能している状況に驚き強く興味を持ち、社会ネットワーク分析(Social Network Analysis: SNA)を通してリアーチェで共生社会についての新たな知見が得られると考えた。SNAとは、対象とする社会を構成するメンバーの特徴や行動形態は、メンバーをとりまく相互の人間関係のネットワークで形作られていくという考えに立ち、メンバーの属性をネットワーク分析の際のパラメータとして考慮するという分析方法である。難しいとされる一つの共同体の全住民を対象とする社会ネットワーク調査を実施することで、多言語のみならず多文化な共生社会のコミュニケーションネットワークの分析を試みようと考えた。

2. 研究の目的

(1) 多文化共生が目指すものの一つは、相互性と双方向性の実現であるといわれている[1]。本研究では、多文化共生社会がうまく機能している共同体において、そこでどのようなメカニズムが働いているのかを共生社会の相互性と双方向性に着目して全体構造を明らかにすることを目的とする。

(2) 相互性とは、住民間におけるお互いの文化の違いを尊重した物理面・精神面の協力やサポートであり、双方向性とは、共同体の公的サービス・私的サポート両面にわたるさまざまな場面で、移民であるからといった差別をされずに役割分担がなされていることである。例えば、移民を受け入れている従来の住民から移民へという一方ではなく、移民も役場で雇用されることで公的サービスを分担し、従来の住民や他の移民をサポートしていくことなどである。リアーチェでは、上記の相互性並びに双方向性が少なからず実現していることを事前の調査で知り、どのような形態で、どのくらい実現されているのかを、住民間のコミュニケーションネットワークに着目してSNAを行う。

3. 研究の方法

(1) SNAによるコミュニケーションネットワークの調査では、住民へのアンケート調査及びインタビューを実施する。質問票調査によるネットワーク調査・分析の結果をより詳しく確認するために、地元住民・移民・支援団体など立場の異なる住民に半構造化ロングインタビューを行い、定量・定性両面の分析から知見を得る。アンケートとインタビューに際しては、本人の合意の上で行い、アンケートで答えたくない項目については回答を求めなかった。

(2) リアーチェの住民を対象にアンケートを実施した。個人の属性として、年齢層・性別・出身国地域・民族・職業・学歴・家族構成・宗教を聞いた上で、以下について尋ねた。

あなたは誰に物理的及び精神的なサポートやサービスを受けますか。(相互性)

あなたはリアーチェで最近5年間に誰とどんな活動をしましたか。(双方向性)

これら2つの問いについて、「誰」「サポート・サービス・活動の内容」「コミュニケーションに使った言語」「頻度」「場所」について尋ねた。

4. 研究成果

(1) リアーチェで132人の住民にアンケートを行うことができた。アンケートのデータを基にSNAを行った。AとBの住民が、「AがBによってサポートやサービスを受けている」という関係があるとき、AからBへの有向辺でつないでいった。調査の結果、物理面・精神面双方で多様なサポートが浮かび上がってきた。分析はUCINETを用いた。ビジュアル化したネットワークを図1に示す。図1では各ノードの名称は個人名のため非表示にしてある。ネットワークは、全体として密度が濃いということはない

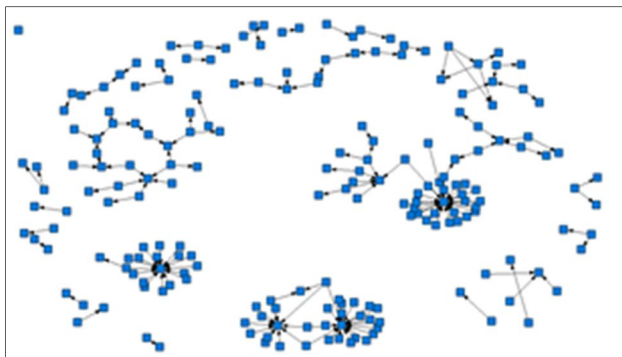


図1 リアーチェのサポートネットワーク

く、ある特定のサポーターがいて、それぞれのサポーターに決まったメンバーの人々がサポートを受けているという様子になっている。リアーチェには「アソシアティオーネ」というイタリア独特の、志を等しくするメンバーによる営利を追求しない団体が現在7つ活動しており、それらのメンバーが移民の定住支援の活動を行っている。活動メンバーは互いにつながって情報を共有しているが、各メンバーがサポートする住民は異なっており、分担して面倒をみているという状況が図1からも見て取れる。サポートネットワークについて、ネットワーク全体の中心性(Degree Centrality)は0.132、ノードから出ている辺の割合(Out)は0.011、ノードに入ってくる辺の割合(In)は0.131であった。ネットワーク全体の中心性はOutが小さいのに対し、Inが大きいことがリアーチェのサポートネットワークの特徴として表れている。サポートをしていることが顕著な人物の、サポートしている人数が3人以上のノードを図2に示す。図2から明らかなように、10人以上をサポートする中心的役割の人物が4人いて、彼らがサポートするノードの70%以上を占めていることがわかる。なお、ここでサポートするノードが1つまたは2つのノードは、実際のデータから家族が多かったためそれらは除外している。サポートネットワークは相互性を表しており、リアーチェにおける支援団体の役割が大きく相互性の実現に影響していることがわかった。

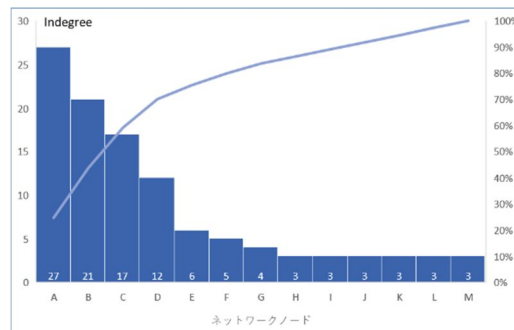


図2 サポート人数が3人以上を占める割合

(2) 双方向性については、アンケートデータから、相互性を見る質問とほぼ同じ人物を回答していた。また、その人物と過去5年間でどのような活動をしたかについては、販売や農業における雇用関係を答える人が大半であり、ボランティアな活動ではないため考慮しないことにした。そのため双方向性を測ってSNAを行うことで共生社会の状況を得るのは今回のアンケートでは難しいと判断した。

(3) 相互性と双方向性について、アンケート調査の結果をより詳しく調べるために、立場の異なる住民(移民・ホスト住民・役場関係者・サポート団体メンバー)にインタビューを実施した。14名の住民に30分~1時間の半構造化インタビューを行った。インタビューでは、年齢や出身などの基本情報に加えて、以下の項目を中心に、自由に話してもらった。

- ・どんなサポートをしたり受けたりしているのか詳しい内容
- ・コミュニケーションに困難を感じる、あるいは感じた過去の経験
- ・現在のリアーチェでの生活についてどのように感じているのか
- ・自身の将来計画

インタビューから得られたことから、リアーチェの多文化共生社会をうまく機能させている要因は次のようなことであることが分かった。リアーチェの首長ルカーノ氏の強力なリーダーシップと、移民受け入れの志を共にする強力なサポート団体の存在、移民へのイタリア語のボランティアな学習サポート、ホスト住民と移民が協働できる仕掛け。商店をホスト住民と移民をペアになって運営、また運営に至るまで知識や技術を共同体として援助、南イタリア地域に特化した歴史的経緯からの温かい受け入れの態度

(4) リアーチェの多文化共生社会の取組は「リアーチェモデル」と称され、イタリア及びフランスのいくつかの自治体で実践されている。例えば、隣接する共同体カミーニでは、「連帯ツーリズム」として世界中からボランティアが集まり、移民の定住支援活動を行っている。カミーニの集落の中に住人がいなくなった空き家をリノベーションして、訪問客(ボランティア・観光客など)を受け入れている。カミーニには学校行事としてイタリアの各地から多くの生徒が訪問し、共生社会について学ぶ場所にもなっている。このような混住を提案したリアーチェにも、空き家をリノベーションして移民が居住している家が散在しているが、訪問客を受け入れるには至っていない。なお、コロナ禍を経たリアーチェの現在は、コロナ禍前よりも移民が半分になったものの、共生社会はそのまま持続している。数年前にルカーノ氏は首長を退いている。しかしながら連帯ツーリズムのアイデアは元々リアーチェモデルで提案されており、リアーチェの取組が他の場所へ伝わる形で持続可能になっている。

(5) ソーシャルキャピタルは、一般に「共有規範」「信頼」「社会ネットワーク」とされ、「社会構造」が加えられることもある。一つの社会において、文化が多様になるほど共有規範や信頼は失われていき、人々のネットワークは脆弱になり、ソーシャルキャピタルは悪化していくといわれている。しかし、リアーチェにおける多言語や多宗教な状況が、ソーシャルキャピタルを悪化させているとは見受けられず、多様性を許容する人々の姿勢、つまり自分たちとは異なる人々を信頼しないことから始めるのではなく、最初の時点でPutnam[2]の言う新たな「us」として迎え入れる態度が人々の信頼を保ち、社会ネットワークを強固にしている要因であると考えられる。そしてその姿勢がリアーチェにおける多文化共生社会を成功させている要因であると結論づけた。

<引用文献>

[1] 宮島 喬 (2009) 「多文化共生の問題と課題」、*学術の動向*、14(12)、10-19.

[2] Putnam, R. D. (2007). E pluribus unum: Diversity and community in the twenty first century the 2006 Johan Skytte Prize Lecture. *Scandinavian political studies*, 30(2), 137-174.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Nakabasami Chieko	4. 巻 -
2. 論文標題 Solidarity Tourism in a Multicultural Society in Southern Italy	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Cultural Sustainable Tourism, Advances in Science, Technology & Innovation. Springer	6. 最初と最後の頁 69 ~ 79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-3-031-10800-6_6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中挾知延子	4. 巻 2020-DC-118(1)
2. 論文標題 南イタリアの連帯ツーリズムにおけるコミュニケーションネットワーク	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 情報処理学会研究報告ドキュメントコミュニケーション（DC）	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中挾知延子	4. 巻 2019-DC-114
2. 論文標題 多言語社会におけるコミュニケーションとソーシャルキャピタル	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 情報処理学会研究報告ドキュメントコミュニケーション（DC）	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中挾知延子	4. 巻 -
2. 論文標題 南イタリアアリエーチェの多文化共生社会におけるコミュニケーションネットワーク 文化多様性とソーシャルキャピタルとの関係を探る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際開発学会第29回全国大会報告論文集	6. 最初と最後の頁 82 - 85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 中挾知延子
2. 発表標題 Solidarity Tourism in a Multicultural Society in Southern Italy
3. 学会等名 International Experts for Research Enrichment and Knowledge Exchange (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アントニオ・リナルディス、中挾 知延子、大音 恭豊	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八千代出版	5. 総ページ数 168
3. 書名 すべての人を温かく迎え入れる村 リアーチェ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	柏崎 梢 (Kashiwazaki Kozue) (40735594)	関東学院大学・国際文化学部・准教授 (32704)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------